

|     |  |
|-----|--|
| 研修名 | 乳児保育・教育 幼児保育・教育<br>平成29年7月21日(金) 13:30~16:00 |
| 講演  | 「発達とそのメカニズム」                                 |
| 講師  | 東京大学大学院 遠藤 利彦 氏                              |

### 講演要旨

- 1) ①・最新科学から乳幼児の基礎を知る。
- ②・生涯発達における乳幼児期の意味

### 感想

・遠藤先生は保育の専門というより、発達の基礎の研究者としての立場からご講演くださった。

・遠藤先生はスヌーピーのライナスが持つ「安心毛布」子どもが、そういうものを必要としたり、しなかったりする事が生まれもった気質なのか、育てられ方、環境のあり方の違いなのかという興味が発端となり発達の研究を始められた。

・子どもがよく育つ大人との関係は、「完璧ではない関係」すなわち「ほどよい関係」であり、完璧な育児や保育の中では、こどもはよく育たない。

・「完璧でない関係」とは、いつも思い通りになるとは限らない状況、それにより子どもは、適度なストレス、フラストレーションにさらされ、ぬけ出したいと強く思い行動を起こす。適度なストレスにさらされてこそ、自身ではね返そうとする心の強さ、たくましが育つ。「心のたくましさ」とは感情が崩れた時に、自分自身で立て直そうとする感情の制御であり、そんな基礎的な力を身につける事が、今後生きていくうえでの大切な糧となる。

・乳幼児期の過ごし方の大切さを、研究の中で確かめる。  
長期縦断研究 剥奪児研究 介入研究

・人による環境が不足した場合や、不自然な一斉保育が強要された場合、子ども一人ひとりの欲求シグナルが無視され、キャーと泣いて誰かにくつつこうとするが誰からも満たされない。こうした子どもたちは、後に環境を回復してもダメージが続いてしまう。「自己と社会性」に受けたダメージは改善されず残ってしまう。

・アメリカペリー地区（貧困地区）の調査（就学前教育を受けた群と受けていない群に分けてその後の幸福度を縦断的に調査）で2年間就学前教育を受けた人が、なぜ大人になった時幸せになる確率が高かったのか？小学校の先取り教育で計算や文字を覚えたから（認知能力）ではなく、それ以外の力が作用したのではないか（非認知能力）

・非認知って何？「自己と社会性の力」これを身につける事ができた事が40歳の階段の幸せを支えている。

・どうして就学前教育で身につける事ができたのか→ちゃんとした大人（先生）がいてくれる。家庭では経験できなかったアタッチメントを親以外の大人（先生）と経験し直す事ができた。→大人になってからの幸せの基盤

・子どもの心は人との相互作用の中で育つ。人間の赤ちゃんは、生理的早産で生まれ、子ども時間も長い為、母親一人の育児は難しい。親以外の大人によるケア、養育、集団共同型子育てが必要。

・赤ちゃんは弱々しい存在だが、色々な力を持っている。有能で能動的で個性的、視覚以外の五官はすでに発達。ほぼ大人と同じ物の理解をしている。心の性質、心の働き、誰もが思っているあたり前の理解ができる。

・「もの言わぬ赤ちゃん」の沢山の能力がデータから証明され、保育園がこれからの社会にとっていかに重要かという事を再認識した、常識的で温かい感情をもって接してくれる大人として、子ども達の「自己と社会性の力」を支える関わり方を行っていききたい。

（記録 八雲保育園 迫田 顕子）

